

図書室と仕掛け

～仕掛けを用いて図書室の利用者を増やす～

Library and Device

～Use devices to increase the number of users in the library～

竹内千尋 矢澤まひろ 上坂夏希 石田萌

Takeuchi Chihiro Yazawa Mahiro Uesaka Natsuki Ishida Moe

大阪府立天王寺高等学校 文理学科

Humanities and Science course, Osaka Prefectural Tennoji high school

Abstract: We conducted this research because we thought there was a fact that students in our school do not read much and the library is not used much. We set up a system where students can share interesting parts of the book by putting stickies on them, and a system where they can see the cover of the book when they peek into the library, and investigated the increase and decrease in the number of library users compared to normal times.

1. 序論

我々は大阪府立天王寺高校(以下本校)において、生徒があまり読書をしていないと感じ、図書室もあまり利用されていないという事実があると考えた。読書課題の提出日前は利用者数が増えるが、「何もない日」の図書室の利用者数は少ないため、これを増やすことを目的とした。ここでいう「何もない日」とは定期考査、学校行事、及び読書課題提出の一週間前、または短縮授業日を除いた日と定義する。我々は読書を想起させる仕掛けを用いることで図書室の利用者数を増やすことができると仮説を立てた。

2. 材料と方法

各条件で実施日時を設定し、それぞれ4日間で図書室の利用者数と利用状況を調査した。我々は図書室内において、本を借りること、または読書の目的での利用者と、勉強等その他の目的での利用者を目視で数えた。各条件と実施期間、仕掛けの詳細は以下の通りである。

検証1) 何も仕掛けを施さない状態

〔期間〕10月30日、11月4日から6日の16時から17時

検証2) 仕掛け①を施した状態

〔期間〕11月13日、17日から19日の16時から17時

検証3) 仕掛け②を施した状態

〔期間〕12月9日から11日、14日の16時から17時

検証4) 何も仕掛けを施さない状態(二度目)

〔期間〕1月6日から8日、12日の16時から17時

〔仕掛け①〕

大阪大学大学院経済学研究科経営学系専攻教授の松村真宏氏の提案を受け、付箋を貼っても良い本を一冊用意し、付箋とともにカウンター近くに設置した(図1)。使用した本は「李陵・山月記」(著:中島敦)である。「李陵・山月記」を検証に用いた理由としては、内容は深く知らなくてもタイトルは耳にしたことがある人が多いと考えたこと、また教科書に載るほどの名作で天高の千冊(本校国語科による推薦図書集)に掲載されており、様々な視点で楽しめる本だと思ったことが挙げられる。



図1 仕掛け②を設置した様子

〔仕掛け②〕

上から覗くことのできる、箱型の仕掛けを段ボールで作し、本校の玄関ホールにある本の返却ボックスの上に、許可を得た上で設置した。仕掛けの中には、本の表紙と、図書室の利用を促すメッセージを入れた。使用した本は「停電の夜に」(著:ジュンパ・ラヒリ)である。この本は「李陵・山月記」同様、天高の千冊に掲載されており、この本の特徴を模した仕掛けを作りやすいと考えたからである。仕掛けは、この本の題名に因んで停電した家を模した。

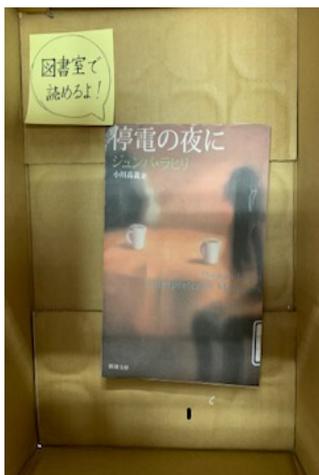


図2 仕掛け②家を模した箱 図3 左の写真の内部

3. 結果

目視での調査の結果、読書を目的とする利用者より、自習をするために図書室を訪れる利用者の方が多かった。検証2において、本に貼られた付箋の枚数は1枚(13ページ14行目)で「“声” となっているのがおもしろいと思います」というコメントがあった。

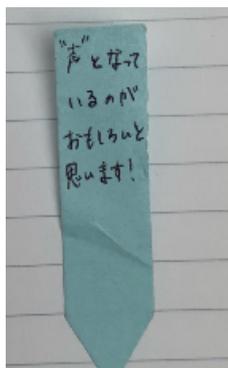


図4 貼られていた付箋

表1) 検証期間別に見る利用者数

	本関連の利用者数 (人)	他の目的の利用者数 (人)
検証 1		
10月30日	3	2
11月4日	1	9
5日	5	4
6日	12	10
検証 2		
12日	4	4
17日	6	16
18日	3	14
19日	4	10
検証 3		
12月9日	2	12
10日	2	10
11日	2	11
14日	1	14
検証 4		
1月6日	2	2
7日	0	6
8日	1	4
12日	3	5
計	51	133

表2) 本関連の利用者における平均値・中央値

	平均値(人)	中央値(人)
検証 1	5.25	4
検証 2	4.25	4
検証 3	1.75	2
検証 4	1.50	1.5

4. 考察

結果から、仕掛けによって利用者数が増えたとは言えなかった。本校の生徒は部活動に所属していることが多いため、部活動のある放課後に図書室を訪れることは難しく、昼休みの利用者数を数えたほうが仕掛けの効果が確認できたのではないかと考え

られる。また、利用者がいつも同じような顔ぶれとなっており、新たな利用者を獲得することには繋がらなかったようだ。

検証1)

模擬試験に向け、勉強している3年生が多かったと考えられる。我々は読書や本の目的ではなく、勉強する目的で図書室を訪れている人のほうが多いことを確認した。本を読むといっても、長時間の滞在はなく、部活動が始まる前には図書室を立ち去る生徒が多かった。

検証2)

検証2が終わったときに本に付箋が1枚しか貼られていなかったことから、付箋を最初に貼ることは抵抗があったのかもしれないと考えられる。また、他の検証日に比べて僅かに利用者が多い点に関しては読書ノートの提出日2週間前であったためではないかと考えられる。

検証3)

箱を覗き込む生徒は見られたものの、覗き込んだあとに図書室を訪れるという行為には繋がらなかったようである。そのため、箱と図書室を繋ぐ新たな仕掛けや、より図書室を想起させるような工夫を加えることが必要であったのではないかと考えられる。

検証4)

本を目的とする利用者数が検証1の際とあまり変わらなかったことから、仕掛けをしたことの話題性によって図書室の利用者が増えたとは言い難い。これに加えて、検証3の後に冬休みを挟んだことも利用者数が変化しなかったことの一因としてみることができる。

5. 今後の展望

次回この検証を再び行おうとすれば、我々は昼休み及び終礼後すぐから16時までの利用者数もカウントし、仕掛けの内容を図書室へ誘うようなものにする必要があると考えた。また、複数の仕掛けを組み合わせたり、長期的に研究を継続したりすることも効果を引き出すことにつながるのではないだろうか。

今回の研究において、我々は図書室には豊富な蔵書や静かな環境などの魅力が多くあることを再確認した。この魅力をいかに広く伝えていくかが今後の課題である。

6. 謝辞

本研究に助言をくださった大阪大学経済学部経済研究科の松村真宏教授と課題研究指導担当の天王寺高校生物科河井昇教諭、天王寺高校芸術科芝田真美教諭及び天王寺高校国語科平岡郁男教諭に心より感謝申し上げます。

7. 参考・引用文献

1. 松村真宏（2016）仕掛け学—人を動かすアイデアのつくり方．東洋経済新報社